

自治医科大学附属病院における「地域医療」

自治医科大学附属病院 病院長

消化器・一般外科

佐田

なひろ
尚宏

2015年4月から自治医科大学附属病院長を務めることになりました。自治医科大学附属病院は、今後とも栃木県、下野市の地域医療を支える病院として発展するよう努力したいと考えています。ご支援、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

地域医療 (community medicine) という言葉の歴史

自治医科大学の建学の精神は、「医療に恵まれない地域の医療を確保し、地域住民の保健・福祉の増進を図るため、医の倫理に徹し、かつ高度な臨床的実力を有し、更に進んで地域の医療・福祉に貢献する気概ある医師を養成するとともに、併せて、医学の進歩を図りひろく人類の福祉にも貢献すること」です。この建学の精神から、自治医科大学は「地域医療の大学」であるといわれています。「地域医療」という言葉は、1970年頃佐久市立国保浅間総合病院の吉沢国雄先生によって「包括医療（保健予防、疾病治療、後療法および更生医療）」を、地域住民に対して社会的に適応し実践すること」と定義されました。当時は「病院医療」が「地域医療」の対義語として使用され、1978年のアルマ・タ宣言に基づいた医療と健康の問題を地域住民の力で解決しようとする佐久総合病院や諏訪中央病院などで実践されていた「農村医療」が、「地域医療」の言葉の基礎になっています。しかし、時代の変遷と共に、医療構造も変化し、この「地域医療」の概念も徐々に変化してきました。

21世紀の現在、以前は地域医療の対極にあるとされた大学病院において「地域医療」を考える時代になりました。

21世紀の地域医療

「地域医療」のテーマは、80年代には予防と治療の一体化が課題とされ、それが概ね実現された90年代には医療と福祉の一体化が課題となりました。そして現在では、住民を巻き込んだ予防医療、患者にやさしい医療、医療と継ぎ目なく提供される福祉、これらを一体的に提供することが目標になりました。キーワードは「継ぎ目ない」という言葉で、予防医療から高度急性期医療、緩和医

療、福祉、介護まで含めた継ぎ目ない医療・ケアが現在の「地域医療」です。その21世紀型「地域医療」では、大学病院をはじめとした高度急性期医療を担う基幹病院も、この継ぎ目ない「地域医療」の一翼を担っています。このような変化は、手術をはじめとした治療法の進歩に寄るところが大きく、継ぎ目のない医療・ケアの中に高度な手術や抗がん剤治療を組み込まなければ成立しなくなり、また高度な手術や抗がん剤治療のフォローアップを基幹病院だけで

行えなくなった量的な問題もあります。そのために、がん診療や心筋梗塞、脳卒中、糖尿病で患者さんを連携して診察するツールである地域連携クリティカルパスが作成され、色々な病気で病院、診療所の連携を強化する試みが行われています。最近では、病院や診療所の電子カルテを接続する「とちまるネット」という診療情報連携も開始されました。

栃木県では2013年に第6期の保健医療計画が作成されました。その中でも、病院と病院の連携、病院と診療所の連携が重要な課題として、それぞれの疾患毎に目標が記載されています。地域医療をそれぞれの都道府県で考えて病床機能の分化を行う制度（病床機能報告制度）を、2025年に実現することを厚生労働省は提案しています。そのような社会情勢の変化、「地域医療」の変化に対して、自治医科大学附属病院は今後10年間で診療能力の強化を行っています。病床機能報告制度が実施される2025年、栃木県200万人の「地域医療」を担う高度急性期病院となることを目標にしたいと考えています。

